



ショパン・コンクールの覇者たち

— ツィメルマン、ブレハッチ、ブルース。

世紀をつなぐ、頂点のピアノ。

1975年(第9回)優勝

18歳でショパンを制した伝説。優勝から半世紀 — 永遠の響き、ここに。

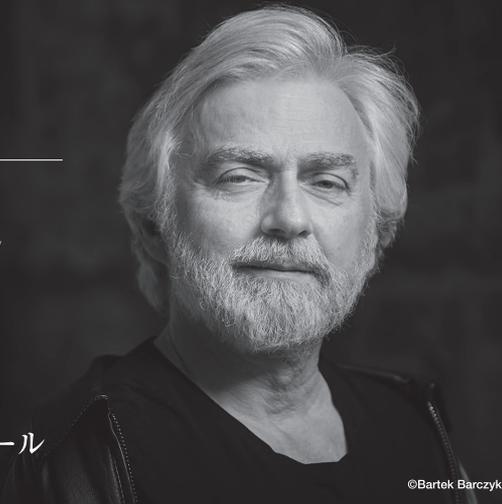
クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル

公演終了

2025年12月 3日(水) サントリーホール

12月 8日(月) サントリーホール

12月18日(木) 東京オペラシティコンサートホール



©Bartek Barczyk

2005年(第15回)優勝

特別賞を独占した、ポーランドの至宝。あの“舟歌”とともに刻む、20年の軌跡。

ラファウ・ブレハッチ ピアノ・リサイタル

2026年1月29日(木) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

2月 3日(火) 19:00 サントリーホール **完売**

S席¥9,000 A席¥7,500 B席¥6,500 C席¥5,000

〈プログラム〉

ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第14番「月光」嬰ハ短調 Op. 27-2/シューベルト:4つの即興曲 D 899 Op. 90
ショパン:舟歌 嬰ヘ長調 Op. 60、バラード 第3番 変イ長調 Op. 47、3つのマズルカ Op. 50、
スケルツォ 第3番 嬰ハ短調 Op. 39

2021年(第18回)優勝

鮮烈の覇者、その進化は止まらない。ショパンの先へ — 艶やかに開く新章。

ブルース・リウ ピアノ・リサイタル

2026年6月7日(日) 16:00 高崎芸術劇場 大劇場

S席¥7,000 A席¥5,000 B席¥4,000

2026年6月8日(月) 19:00 すみだトリフォニーホール

S席¥9,000 **残りわずか** A席¥7,000 B席 ¥5,000

〈プログラム〉

リゲティ:ピアノ練習曲集 第1巻第4番「ファンファーレ」/ ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第14番 Op.27-2「月光」
ショパン:ノクターン第7番 Op.27-1、ノクターン第8番 Op.27-2/ラヴェル:道化師の朝の歌「鏡」より第4曲
ドビュッシー:夢/ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第21番 Op.53「ワルトシュタイン」
モンポウ:「月の光」によるグロッサ、「月の光」による幻想曲/リスト:スペイン狂詩曲



©Bartek Barczyk

ジャパン・アーツぴあコールセンター 0570-00-1212 www.japanarts.jp

主催:ジャパン・アーツ ※チケット料金には消費税が含まれています。 ※特別料金については、ジャパン・アーツホームページをご確認ください。

公演詳細は
こちらから



ツイメルマン、ブレハッチ、ブルース・リウ 三者三様の未来、 新たなる境地へ

青澤 隆明 (音楽評論)

©Bartek Barczyk

©Bartek Barczyk

5年に一度の、ワルシャワの秋が終わった。ショパンの故国での熱狂から歩み出した若き才能への期待は大きく、コンクールでの注目はそれだけの責務と負荷をひとりひとりの今後にかけてくる。そして、音楽家としての成熟は、個々の創造性や孤独に課された生涯のミッションなのである。



©Bartek Barczyk

1975年という時代に、18歳でショパン国際ピアノ・コンクールの覇者となったクリスチャン・ツイメルマンに、どれだけの重責が負わされてきたかはちょっと想像しがたい。なにせ1955年のアダム・ハラシェヴィチから20年も待望されたポーランドの英雄であった。

ツイメルマンの演奏美学は、気高く清潔なものだ。透明な音と見通しよい知的な造型を徹底する姿勢と、人間的な芸術思索と情熱が相俟って、精緻な演奏表現をかなえていく。楽器そのものや音響をも知悉して、空間を含めた全体をコントロールすることで、自らの理想とする響きを希求する。音楽という芸術を、空間のなかに織りなされる知的な生命の推移と交感と捉えているからだろう。

そのツイメルマンが今秋から探索していたのが、プレリュード&Co.(カンパニー)という新たなプログラムだ。バッハ、ショパンから、シマノフスキ、ガーシュインやカプースチンまで多様に織り込み、彼独自のプレリュード選集を編む斬新な挑戦である。2025年12月18日のリサイタルではいったん24の長短調を揃えたが、最終的にどのような全体像を築き、ツイメルマン自身にとっていかなるプレリュードとなるのか、この先が楽しみだ。

そして、21世紀に入った2005年に、第15回の栄冠をさまざまな特別賞とともに手にしたのがラファウ・ブレハッチだった。ポーランド人として30年ぶりの快挙であるだけでなく、多くの人が彼の演奏に、ショパンの姿を重ねて想像したことだろう。清らかで明快で、ノーブルなその演奏は、ショパンの健康的な魅力を優美に叶えるようだった。バラードやスケルツォといったショパンの殊に劇的な作品、ベートーヴェンの嬰ハ短調ソナタ、そしてシューベルトの即興曲作品90でも、じっくりと歳月を重ねたブレハッチの深化が期待される。



©Christoph Köstlin

そして、ブルース・リウである。2021年の前回優勝者となったリウは、ショパンでも綿密な演奏を聴かせるだけでなく、彼自身の自由を謳うように感じられたが、そこからラモー、バッハ、フランス近代、ロシア音楽へも、瑞々しい感性を拓けるように羽ばたいてきた。とらわれることのない柔軟さや、自身の興味に率直なピアニストだが、今回のプログラムはとくに驚きと想像力を掻き立てる。「月と夢」をテーマに綴られたストーリーだというし、ベートーヴェンは今後の探求も見据えたものだろう。変化に対して開かれているのがブルース・リウの頼もしいところで、ときに気まぐれにみえても自身の直観によるものだろうから、それだけ新鮮ななにかが息づいているはずだ。



©Marco Borggreve

晩秋から初夏にかけて、三者三様の現在を聴き継げば、そこにコンクールを超えて響き出す、それぞれの探求の芯の通った、しかしやわらかな広がりを感じられるだろう。

公演情報は裏面をご確認ください。